

dbjapan の 10 年を振り返って Considering the Japanese Database Community from a Point of View of dbjapan

横田 一正[♥]

Kazumasa YOKOTA

dbjapan は日本データベース学会のメーリングリストであるが、それは 1992-2002 年の 10 年間日本のデータベースコミュニティを結ぶ、組織とは独立のメーリングリストであった。当初はインターネット環境が貧困であったことから、dbjapan は単なるメーリングリスト以上の役割を果たしてきた。著者は dbjapan を 10 年間にわたって運営してきたので、この経緯と緒データを紹介する。

dbjapan is a mailing list of DBSJ, while it had a 10-year history (1992-2002) as a mailing list independently of any organizations. As the Internet environment had been very poor in the beginning of 1990s, dbjapan had played an important role in the Japanese database community. The author had been an administrator of dbjapan. In this article, I explain its brief history and various data.

1. はじめに

現在、日本データベース学会 (<http://www.dbsj.org/>, DBSJ) には、会員用に dbjapan というメーリングリスト (ML) がある。この dbjapan 自体は 10 年以上の歴史を持った、特定の組織とは独立の ML であったが、DBSJ の設立を期に DBSJ の会員用 ML とした。この変更についてはさまざまな議論があったし、またさまざまな御意見や御批判もいただいている。

著者は、dbjapan を立ち上げ、多くの方の協力で 10 年以上にわたって ML を運営してきた。本稿では、dbjapan の 10 年間の歴史、この間の諸データを説明し、DBSJ との合体の経緯、今後の DBSJ における dbjapan の役割等を考えてみたい。

2. dbjapan の概要

データベース機能を完全にVRシステムに組み込むことを dbjapan は名前の通り、日本のデータベースコミュニティを結ぶ ML を目指したものであった。dbjapan のもっとも大きな特徴は、特定の組織に属したのではなく、それらから独立に運営してきたことである。

dbworld(<http://www.cs.wisc.edu/dbworld/>)という米国の Wisconsin 大学の Raghu Ramakrishnan 教授の運営している世界規模の ML がある。dbjapan と名称は dbworld に倣ったものであるが、関係はない。当初(1993年3月頃)両者の連携の議論があったが、投稿内容の違いから連携はしなかった。

最初に dbjapan を中心とした歴史を簡単に紹介したい。

1992年	7月	情報処理学会データベースシステム研究会(DBS研)主要メンバーとdbjapanの名称、運営方針を決定。
	7月	夏の合同ワークショップ(札幌)でdbjapan設立の発表と参加募集。
	8月	電子情報通信学会データ工学研究会(DE研)は組織的に参加決定。
	9月	dbjapanをICOT(新世代コンピュータ技術開発機構)で立ち上げ(71メールアドレス、約107人)。
1993年	7月	ACM SIGMOD日本支部(SIGMOD-J)設立。
	12月	ACM SIGMOD日本支部会員募集開始。
1995年	3月	ICOT解散。
	4月	dbjapanをICOTから京都大学に移動。
	5月	dbjapanホームページ(HP)立ち上げ。
1997年	4月	dbjapan (とHPを)を京都大学から岡山県立大学に移動。
2002年	5月	DBSJ設立。
	7月	DBSJホームページ開設、会員募集開始。
	8月	dbjapan運営停止(ちょうど10年)。
	9月	DBSJ のMLとして新dbjapanを立ち上げ。

dbjapanは1992年9月1日から2002年8月31日までのちょうど10年間運営され、2002年9月1日からはDBSJのMLと新しくなった。dbjapanの運営サイトの移動は著者の異動(ICOT 京都大学 岡山県立大学)に伴ったもので、DBSJのホームページも著者のサイトで運営している。

dbjapanを立ち上げる直接の動機は、著者の個人的な経験に基づいている。dbjapanを立ち上げる1年半ほど前に、ICOT でDBS研と情報処理学会の人工知能研究会の合同の研究会を開催した。そのときに、論文募集や参加募集等の広報活動の際に、データベースコミュニティの情報流通基盤の貧困さを痛感した。もっぱら通常の郵政省メールと電話に頼っていた状態だった。当時は、Web環境はまだなく、大学を中心としたメール環境とネットワークニュースが中心だった。その中でICOTは比較的先進的なネットワーク環境を持っていたので、なおさら脆弱さを痛感した。dbjapanの構想を、DBS研やDE研に打診したが、当初答えは必ずしも芳しくなかった。理由は、研究会連絡委員の多くもメールアドレスをもっていない状態で、メール環境の整備状況によって差別が生じるため、ということであった。

dbjapanはいくつかの反対もあったが、71の参加者(アドレス)で立ち上げた。DE研(鈴木健司委員長)には立ち上げ間際に組織的な参加を決定していただいた。半年後の1993年3月時点で、dbjapan参加者は約180人(137アドレス)であった。その時点で dbworldの日本人参加者は わずか18人(このうちdbjapan参加者は15人、その他はICOTの3人)しかいない状態だったので、予想以上の参加者であった。また特定のコミュニティで不特定を対象としたMLとしても先駆的な試みで、他分野の研究会から羨望の目で見られていた。

1993年にSIGMOD-Jが設立され、その年末に会員募集が始まったが、SIGMOD-JのMLの運用は1997年の後半からであったし、こちらは企業からの参加者が多く、参加者がかなり異なっていた。その他に、会議参加者のリストを基にしたMLが京都大学上林研にあったが、MLの信頼性ではdbjapanが優れていた。

日本におけるデータベースコミュニティの規模は、企業の

[♥] 正会員 岡山県立大学情報工学部
yokota@c.oka-pu.ac.jp

利用者を見ると膨大になるが、研究者に的を絞ると約1,500人程度と推測している。dbjapanは多いときで1,000人弱をカバーし、延べでは2,000人以上がdbjapanに参加してきた。日本のデータベースコミュニティの情報流通の活性化に大いに貢献したと考えている。dbjapanはMLであるが、それ以上の存在感をもっていた。

Webの利用に関しては1994年から一般的になり始めていた。この年の3月にdbjapanの記事に初めてURL(九州大学)が登場して以来、NTT(6月)、千葉大(7月)、ICOT(10月)、京都大、佐賀大(11月)、JAIST(12月)と登場してきた。dbjapanのHPは翌年の5月に立ち上げ、徐々に充実を図ってきた。

結果からみれば著者の異動に伴って運営サイトを移動させてきたが、これについては当初は大きな議論もあった。ICOT解散で運営サイトの変更が差し迫ってきた1995年1月にはdbjapanの登録者は350人を超え、もはややめることができない存在になっていた。阪神・淡路大震災の1週間後、dbjapanをいかに存続させるか、どこに移管すべきかを、西尾先生(大阪大)、田中先生(京都大(当時神戸大))、上善氏(千里国際情報)と、まだ震災で交通マヒ等で混乱している大阪で打ち合わせたことを生々しく思い出す。結果とすれば、移動が予想以上にスムーズで周囲のサポート体制も得られたので、これまでの経緯の通りとなった。

しかし岡山県立大学に移ってからはdbjapanの位置づけを見直したくなっていた。

- ・Web環境が急速に拡大し、掲示板などの新しい情報流通方法も広がってきたので、dbjapanをML、HP以上の新しいものとしたかった。

- ・多くの方の手助けに依存しながらも、基本的には著者個人の労力にもっと大きく依存した運営方式では新しい展開を行うには限界があった。

- ・ウイルスメール、ネットワーク障害、マシン障害等のトラブルを考えると、地方大学の一研究室の環境では限界があった。

- ・長年一個人に依存した形できたので、若手の新しいアイデアで発展させてほしい。

等の理由で、技術的には簡単でも、前に踏み出すことができなかった。また10年で個人的な運営は中止することはすでに決めていた。そのため、何年か前から運営サイトの打診を始め、9年目となる2001年にはdbjapan上で公募を行ったが、応募者はいなかった。

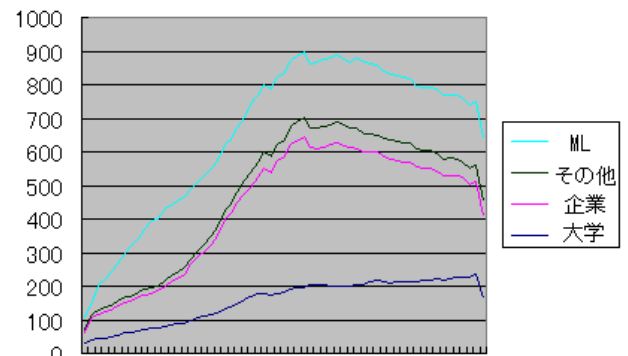
DBSJ設立の話は数年前からあったが、それが具体化したのは2001年後半から2002年の初めに掛けてであり、2002年3月のデータ工学ワークショップ(DEWS2002)で初めて一般に公開された。DBSJについては文献[1]のように、DSS研、DE研、SIGMOD-Jから独立した仮想学会として位置づけられており、従来の組織とは異なっている。この考え方は、それまでのdbjapanの方針とほぼ合致しており、dbjapanをDBSJに合体化することにした。これに関して、DEBSJの設立準備を精力的に進めていた増永先生(お茶の水女子大)を合意し、5月21日のDBSJ設立集会でdbjapanの終了と、新dbjapanの構想を発表した。スケジュール通り、2002年9月1日に予定通り切り替わり、現在に至っている。

3. dbjapanの諸データ

10年間のdbjapanがどのようなものであったか、統計データを紹介する。

まずメンバー数の推移は図1のようになっている。

年毎の数字は表1のようになっている。最後に落ち込んでい



1992.9~2002.8(2ヶ月毎)

図1. メンバー数の推移

表1. dbjapan登録数の推移

年(9月時点)	大学	企業	その他	ML	登録数	総人数
1992	29	33	9	36	71	107
1993	62	91	15	130	168	300
1994	81	121	16	213	218	400
1995	112	190	23	202	325	515
1996	160	315	40	188	525	713
1997	183	405	49	197	637	834
1998	206	409	59	200	674	874
1999	206	392	57	212	655	867
2000	215	355	56	197	626	823
2001	217	310	51	190	579	769
2002	163	248	44	187	455	652

るのはDBSJに移行中のためである。大学からの参加者はコンスタントに伸びているが、企業の参加者は1998年がピークでその後は減少に転じている。dbjapanはローカルMLの登録を認めていたため、正確な参加人数はつかめないが、ピーク時に900人、延べ参加者は2,000人を超えていると考えている。

投稿記事の件数は表2のようになっている。ループがあっ

表2. 投稿記事数

年	記事数	記事数/月
1992	40	13
1993	191	16
1994	276	23
1995	233	19
1996	231	19
1997	252	21
1998	300	25
1999	234	20
2000	234	20
2001	256	21
2002	164	21
合計	2411	

が、その件数は減らしている。投稿記事の件数は10年間比較的コンスタントで安定していた。投稿記事の内容はエラーの200件弱を引くと表3のようにになっている。研究集会の案内が全体の3分の2近くを占めている。データベース分野では、個々のソフトウェアプロダクツのトラブルやノウハウ関係の投稿の需要もあったが、dbjapanでは多くの人の共通の話題でないことから投稿されなかった。

投稿者の人数は全部で397人、投稿件数の多い上位10人で978件(41%)、上位20人で1,292件(54%)となっている。dbjapanの延べの登録者を焼く2,000人とすればその中の20%の人が投稿件数を持っていることになり、非常に高い割合である。

表3. 記事の内容

記事の内容	件数
国内研究集会案内	970
国際会議案内	668
データベース議論	250
お知らせ	102
dbjapan	72
講演会	66
登録関係	43
教官募集	39
雑誌	34
レポート	28
公募	19
その他	120

4 . dbjapan と DBSJ

dbjapan を廃止し、DBSJ のメーリングリストに衣替えしたとき、もっともたくさんいただいた意見は、「dbjapan が独立の存在から特定の組織に従属したのは残念だ」というものであった。これについては2点を述べておきたい。

- ・ dbjapan はデータベースコミュニティでは空気のような存在になっていた。このような場合、トラブルが生じれば非難は殺到するが、正常時の運用コストについて考えられることは少ない。dbjapan の存在感が増すにつれ、運営面での責任とコストは大きくなり、半ば義務感が伴うものに変質していった。代替案が出ない状態では組織的サポートを考えざるをえなかった。
- ・ DBSJ は図2にあるように仮想学会であり、組織的制約は比較的少ない。dbjapan を含め、日本のデータベースコミュニティの public resource を今後展開するにはもっともふさわしいと判断した。

このような考えで dbjapan から DBSJ に移行させた。DBSJ を、dbjapan と同様、データベースコミュニティの空気のような存在にしたいと考えている。現在はホームページ (<http://www.dbsj.org/>) を開設したばかりでまだ充実しているとはいえない状態であるが、その基盤は整った。dbjapan と異なった道を歩ませるためにも、ぜひみなさんの応援をお願いしたい。

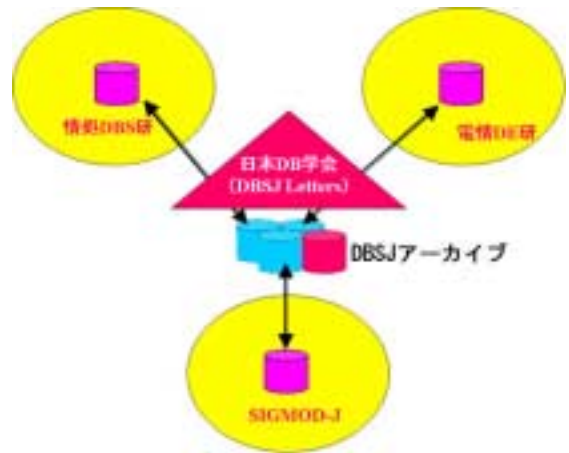


図2 . DBSJ の位置づけ

5 . おわりに

dbjapan の運用に関しては多くの方のお世話になった。とくに、ICOT では谷園子さん(元 ICOT)と高橋千恵さん(JIPDEC)、京都大学では木實新一先生(コロラド大学)、岡山県立大学では国島丈生先生(岡山県立大学)で、各サイトの運営を継続的にサポートしていただいた。また西尾章治郎先生(大阪大学)と田中克己先生(神戸大学)には、dbjapan 立ち上げ前から10年以上に渡り、dbjapan に関し貴重なご意見などさまざまな支援をいただいた。dbjapan を応援していただいたすべての方に、最後に深く感謝したい。

【文献】

- [1] 横田一正, 谷園子, “電子メーリングリスト dbjapan の発展経過と今後の展望”, 『データベース』, 関西データベース協議会, 1995. (<http://alpha.c.oka-pu.ac.jp/~yokota/paper/kansai-DB.ps>)
- [2] 横田一正, “インターネット上のデータベース情報”, 情報処理, vol.39, no.8, 1998. (<http://alpha.c.oka-pu.ac.jp/~yokota/paper/ipsj.pdf>)

横田 一正 Kazumasa YOKOTA

岡山県立大学情報工学部 . 1972 年京都大学理学部卒業 . 情報検索システム、図書館システム、日本語組版システム、洋書管理システムなどの研究開発の後、1980-1984 年ソフトウェアエージで ADABAS, SOAR 等の開発・技術サポート . 1985 年沖電気工業(株)入社 . 1985-1995 年新世代コンピュータ技術開発機構(ICOT)に出向しデータベース、知識データベース、知識表現言語等の研究開発 . 1995-1997 年京都大学大学院工学研究科 . 1997 年から現職 . 主として論理プログラミングや XML を基にした応用システム (デジタルミュージアム、物流システム)などに従事 . 日本データベース学会、情報処理学会、電子情報通信学会、人工知能学会、日本バイオインフォマティクス学会、ACM、IEEE 等の正会員 .